

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しないが、以下のように可能な限り外国語によるコミュニケーション力を評価する。
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解する力を引き続き重視する。
 - ・併せて、高等学校において、「聞くこと」・「読むこと」・「話すこと [やり取り], [発表]」・「書くこと」を統合した言語活動の充実が図られることを踏まえ、情報や自分の考えを適切に表現したり伝え合ったりするために、理解した情報や考えを整理したり、何をどのように取り上げるかなどを判断したりする力を重視する。
 - ・また、コミュニケーションを支える基盤となる知識や技能についても、引き続き評価する。
- 問題は、高等学校学習指導要領「外国語」の目標及び内容等に対応したものとし、CEFR 等を参考に作成する。

また、大学教育を受けるために必要な能力を把握できる問題とするが、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることも考慮し、多様な入学志願者の学力を適切に識別できるようにする。

2 各問題の出題意図と解答結果

共通テスト第6回である令和8年度の問題の種類、各設問数、配点の内訳は【表1】の通りである。

【表1】

内容	発音・ピンイン	語句	表現力	複合的な資料の読み取り	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
設問数	6	6	8	16	14
配点	24点	16点	40点	60点	60点

200点満点は令和7年度問題から変更せず、全体の解答数についても、令和7年度問題を踏襲して50とした。ただし、各設問について「問題の識別力」という点を鑑み、数か所変更した。

第1問は発音問題である。ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき出題している。第2問は、令和7年度問題においてA、B共に3題ずつであったのを1題ずつにした。さらに令和7年度問題で第2問Cに当たる部分は削除し、令和7年度問題で第3問A問1～問3としていた設問を第2問C問1・問2に配置した。また、令和7年度問題の第3問Bを第3問A、第3問Cを第3問Bに配置し、さらに設問数が2題ずつ合計4題であったのを4題ずつ合計8題とした。第4問は、共通テスト第1回から継続して特に充実させてきた形式で、複合的な資料の読み取りを測定する問題である。中間Aでは、家族の会話、表とその解説の文章などから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、複合的な資料の読解力を測る問題とした。中間Bでは、図や発言から情報を読み取り、適切な選択肢を選ばせ、複合的な資料からの表現力を測定する問題とした。令和7年度問題は、受信6（中間A）と、発信6（中間B）の計12問であったが、令和8年度では受信8（中間A）と、発信8（中間B）の計16問に増やした。第5問は長文問題で、文章の流れに合う語彙の選択、内容理解など、長文読解力全般を測る問題としている。令和7年度問題では11問であったが、令和8年度問題では14問に増やした。

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題で、正確なピンインの理解度によってコミュニケーション力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。Dについては昨年同様、会話文をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、リスニング問題の代替にもなり、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段である。そのため、ピンインで出題することは、日本の高等学校における中国語教育では極めて重要である。

A：声母に関する知識を問う問題で、**1**は“k”の正確な把握および“h”や“g”との区別が必要となる。正確な発音の習得と知識が求められ、正答率は高くなかった。

B：韻母に関する知識を問う問題で、**2**は“-iong”と“-ong”および“-eng”の区別が必要となる。この問題も正答率は高くなかった。

C：声調に関する知識を問う問題で、**3**は“四声+二声”，**4**は“四声+四声”の声調の組合せを問うている。**3**と**4**ともに正答率はいずれも高かった。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題である。**5**と**6**共にピンインで書かれた会話文の内容を理解した上で、日本語の問いに日本語で解答する文である。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

A：**7**は文の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。正答率は高かった。

B：**8**はAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることでAよりも難易度を上げている。それにより、Aに比べ正答率が大幅に下がり、識別力が高い問いになった。

C：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ばせることで、文法や語句の理解を確認することが狙いである。なお、**9**～**12**は共に正答率が高かった。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力や理解力を測ることを目的としている。

A：日本語の文を読み、対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。文法や語句の理解を確認する問題である。**13**と**16**は正答率が高かった。**15**も平均点がやや下がったが、**14**は正答率が更に下がり識別力が高い問題となった。

B：中文和訳問題である。日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を確認した。いずれの設問もピンインで示された中国語を的確に理解した上で、日本語の選択肢と対応させて最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。**17**と**20**は正答率がやや高かったが、**18**と**19**は正答率が下がり識別力が高い問題となった。

第4問：複合的な資料から読み取る問題である。

実際のコミュニケーションの場を具体的に設定して、身近な話題に関する資料から、必要な情報を読み取り、複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報処理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得られるように作題した。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力、中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。現実の生活に即した題材であるため、第1問～第3問の出題には使われなかったレベルの語彙もこの第4問に取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙

は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう配慮した。また現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするため、図表・グラフなどを使って情報をスムーズに伝える工夫をした。

Aはペットを飼うことを検討している一家の会話で、様々なグラフと講演内容をまとめた文章から読み取る能力を測る問題である。問1は、会話の内容を的確につかみ、その内容として適当なものを選ぶ問題である。問2は、数字を含む表の内容についての説明を選ぶ問題と、グラフから読み取れる内容として最も適当なものを選ぶ問題である。問3は、講演内容をまとめた文章を読み取り、その内容として適当なものを選ぶ問題である。様々な形態の情報から必要な言語情報を抽出し、それら进行处理した上で、適切な解答にたどり着く能力を測っている。問1の21と22は比較的正答率が低く、また問3の27と28は正答率がさらに下がり、識別力が高い問題となった。

Bは、ボランティアとして動物保護センターの事業を手伝うことにした場面を題材としている。要約した文章や、猫のプロフィール情報、聞き取り内容等を整理し、フローチャートから必要な情報を抽出する力を測る問題である。問1は確認すべきこととして最も適当なものを選ぶ問題である。問2は、希望者から聞き取った内容をもとに、希望と合致する猫を選ぶ問題や、猫のプロフィールに加えるべき情報を選ぶ問題である。問3は、フローチャートとその説明文から適当なものを選ぶ問題である。問1の29と30と問3の35と36は正答率が下がった。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

この第5問も第4問と同様、第1問～第3問の出題には使われなかったレベルの語彙も取り入れている。長文の分量は、昨年度より増やし、1ページ強とした。問題文は、ある国の公務員に関する文章である。問1、問7、問8、問9、問11は内容の理解を問う問題である。

問2、問3、問5、問6、問10は適当な中国語の語句や文を選ぶ問題、問4は適当でないものを選ぶ問題である。

第5問全体を通しては、約69%の得点率で、比較的識別力のある問題といえる。中でも、内容理解に関する問題は正答率が下がり、特に問1の37、問7の44、問11の49と50は正答率60%に満たなかった。

本年度の受験者数は866名、平均点は145.88点、最高点200点、最低点29点であった。

3 自己評価及び出題に対する反響・意見などについての見解

今年度の問題において、各設問について識別力の点から問題の追加・削減を行い、さらに新たな出題形式を採用した。結果、受験者数がほぼ同数にもかかわらず、平均点が昨年度の166.02点(受験者数：874名)から145.88点と約20点下がった。中国語は他の外国語と比べ平均点がやや高いかもしれないが、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、懸念事項がかなり解消された妥当な点数だと考えられる。また、高等学校教科担当教員(以下「教科担当教員」という。)からは、全体的な評価として「設問形式や内容、単語の選択において高校生レベルの出題が多く、高等学校から中国語を学び始めた受験者を意識した出題者の工夫が感じられた」と評価をいただいた。

個別の設問について、まず第1問は、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、リスニング問題の代替にもなり、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段である。日本の高等学校における中国語教育では極めて重要であり、教科担当教員からも良問との評価を受けている。一方で、Cの問いかけの表現やDの発話者の置かれている場面

設定の示し方については工夫の余地があるとの意見であった。

第2問について、まずAの空欄補充問題について正答率は高かったが、判別力のある良問だとの評価を受けている。また、Bの「適当でないもの」を選ばせる形式の問題は難度が高くなるが、この形式の問題も高校生は訓練を受けているということで、必要な問題形式である。Cの短文中の空欄に入る適語を選択肢から2つ選択する問題は、文全体の意味の把握と語の文法的性質の理解が必要とされる。ただし、問1と問2ともに正答率は高かったため、さらなる工夫が必要と考える。

第3問は、日中の双方向翻訳の出題をした。この問題は昨年度の試験において識別力のある問題であったため、今年度はその数を増やした。A問3やB問2の単語の対応ではなく文全体の趣旨を考えさせる設問の解答率が低かったため、このような文全体を把握させる設問は識別力のある問題と考えられる。なお、教科担当教員からは、特にB問3の「文中で用いられている中国語のいくつかの単語の意味を正確に捉えているかを確認する」設問における“开会”の「開会式」「会合」「会議」「同窓会」，“老朋友”「久しい旧友」「長年会っていない親友」「年上の友人」「音信不通の友人」などの組み合わせについて評価を頂いた。

第4問は、得点率が71.03%で比較的識別力のある問題と考えられる。それぞれ複数の素材から総合的に判断するものであり、近年、高等学校で実施されている「探究的な学び」に通じる問題でもある。A問1、問3、B問1、問3(2)など、長文を組み合わせた内容を読み取らせるタイプの問題において正答率が低かった。一方で、A問2のような表やグラフを読み取らせるタイプの問題に関しては正答率が高かった。教科担当教員からは、各問が見開きで構成され、読み進めやすいよう配慮されている点、総合的に判断を要する融合問題という点、選択肢の文章もよく練られている点などにおいて評価を頂いた。しかしながら、特に問2(3)のように片方のグラフのみしか触れていない選択肢については一考を要するという指摘を受けた。

第5問は、得点率が69.19%で、比較的識別力のある問題と考えられる。昨年よりも文章量は増加し、設問数も1題増えている。教科担当教員からは、中国語の語彙や表現を理解しているかを問うだけでなく、内容や文脈を正確に読み取ったり、複数の情報をもとにして考えたりする問いがあり、良問が多いとの評価を頂いている。

4 まとめ

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされている。当該言語に応じた明確な指導目標が存在しないが、問題作成部会としては、まずは日本語を母語とする学習者が高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験を作成する点に変更はない。教科担当教員からも、高等学校からの学習者が対応できるような出題を強く要望されている。本部会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないが、引き続き正答率の特に高い問題と低い問題をそれぞれ分析することによって、語彙レベルや文章題の難易度をそれほど大きく変えることなく、さらに母語話者が多いと考えられるという中国語受験者の特性に対応しつつ、高等学校から中国語学習を始めた生徒たちが「是非受験したい」と思うような作問を心がけていきたい。

今年度も教科担当教員の方々を始め各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。